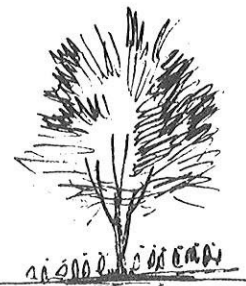


光の子



No.137 2009.8.15

- 年間聖句 一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。
だが、死ねば、多くの実を結ぶ。(ヨハネ福音書12章24節)

残暑お見舞い申し上げます。

社会福祉法人 光の子どもの家



「あじさい」

挿絵・中島英子

「糸とんぼ」

どれも愛らし潤色のさくらんぼ

いづれにも光の小窓さくらんぼ

子等みんな光の子どもさくらんぼ

万緑やすべりて光る滑り台

汗のしぶきは盲目のピアニスト

見るほどに水辺なつかし糸とんぼ

かたつむり山を背負ひて行くごとし

落合水尾(浮野)主宰

真夏日、そして猛暑日、という言葉葉
がきこえたあとでの梅雨あけ宣言とな
りました。体がついていけない、とい
うのは、大人ばかり。子どもたちは、
日焼け顔で朝から夜までエネルギッ
シユです。

と思っています。
 思いつきり遊ぶ、それだけでOKな
 年齢、やりたい事がたくさんあり、や
 らなければならぬ事もたくさんあり
 それらが押し合いへし合いしている年
 齢、自分のこともよくわからなくなっ

ました。自立への第一歩として不可欠なこととして考えてきました。それは決してあたりまえの低いハードルではありませんでした。勉強の環境になかった子どもたちがさまざまな気持ちを抱えながら義務教育に必死でついていた

いす。
おまつりの短冊が街角を彩っています。何かになりたい、出来るようになりたい、これがほしい、とさまざまなかわいい夢が詰まっていました。未来への夢、ここからの願いでしょう。

次へのステップへ

竹 花 信 惠

でもわかつて
いるとでも言いたげな大人びた表情、
そして時には寂しき不安定さ。たくさ
んの言葉はかわさなくても、伝わつて
くるものがあります。そこからのサイ
ンを見逃さないように見守っていた

こそ誰のせいでもなく自らの意思で選
び取りどう生きようか何をめざそうか
ジャンプに向かっての助走が始まりま
す。

光の子どもの家は創立以来二十五年
の歩みの中で高校全人に取り組んでき

更に強い希望としての進学への努力が
始まっています。

彼らのかわりに生きていくことはで
きません。せめて、その努力が実を結
ぶよう応援していく家であり続けられ
るようお祈りに覚えていただけたら幸

よ
う
に
。



「共育ちカンガル―日記」

近藤みちる

(2) 卒乳に思う

この春、私たち母子は卒乳を迎えることとなった。娘は一歳七か月、おっぱいが大好きな甘えん坊。お腹が空いていなくとも、甘えたい時や眠い時には必ず乳をせがむ。夜間も乳児期と変わらず三、四回は乳を飲んでゐた。おそらくお腹が空く間もないのだろう、娘は食事をろくに食わず、おまけに極端な偏食で私を悩ませてゐた。そろそろ乳離れの時期が来たのだと私は悟つたのである。

始めた。Xデーにアンパンマンの顔を描き「この日にバイバイするよ」と教え、毎朝目付けにバツ印をつけた。娘はそのたびにアンパンマンをじつと見つめ、体をよじらせるようにイヤイヤをして見せた。この頃から、娘は授乳の合間に私の胸に顔を埋めたり指で引っ張ったりして、おっぱいをいとおしむような仕草を見せるようになった。卒乳式の前日には、授乳のあとに私の胸に何度も手を振ってみせたりした。

決して出の良い乳ではなかった。そのうえ乳腺炎も幾度となく繰り返した。是が非でも母乳で頑張りたい気持ちと裏腹に、最初の三ヶ月間、娘の体重はなかなか増えず一日中むずかつてばかりいた。良い乳が出るようにと厳しい食事制限を守り、夜中に蒸かした芋を食べたりもした。横目で体重計を覗みながら「もつと飲まないと出なくなっちゃうよ」と、乳を飲むそばから娘に発破をかけていた。そのうち娘はおっぱいを嫌がるよう

る。食事でもおやつでも、何でもよく食べるようになった。夜泣きもなくなり、よく眠るようになった。私も久しぶりに朝まで一度も起こされずに熟睡できる夜を取り戻した。

娘の見事なまでの卒乳ぶりに、母はどうやら置いてけぼりを食ったようだ。卒乳前よりも少し大人びた表情を見せる娘が頼もしくもあり、一方で一抹の淋しさを覚えずにはいられない。きつと子供は過去なんか振り返らないのだろう。

日中乳をせがむようになった。私は娘が欲しがる時に欲しがるだけ乳を飲ませてやった。

このあと昼寝前の一時間、娘は乳をせがんで狂ったように泣き続けた。泣き疲れてそのまま眠つて

い娘の寝顔を見つめながら、私は心の中で何度も礼を言った。もう二度と乳を飲ませてあげられ

卒乳式の1週間前からは、カレンダーを使ってカウントダウンを

しまった。夜はパパの抱っこで散歩に出て、深夜になってようやく

ないと思うだけで、切なさとし
さで胸が張り裂けそうになり、涙

卒乳の子に満天の春の星



エッセイ

ことよせむら

私が今住んでいるところは、埼玉県の北東部、利根川の右岸に接する小さな町、人口が一万五千人弱の、大利根町というところである。

しかし、明治二十二年の合併までは琴寄村であった。この名は現在も大字名に残っている。現在は「ことより」と読んでいるのだが、昔は「ことよせ」と読んでいたそうである。

では、なぜ「ことよせ」か。それには、このあたりの地理的な、歴史的な環境の説明が必要と思われる。

私の家の二百メートル程南に、古利根川と呼ばれる小さな川が流れている。この川をはさんで、かなり広い自然堤防が残っていた。それによって、昔は、もっと広い川だったろうと思える様子を伝えていた。しかし、この川だけが利根川だった訳ではなく、いろいろな名のついた川が、このあたりには幾すじもの川が乱流していたようである。したがって、この地方の住民は、絶えずこれらの川の増水や洪水によって悩まされていた。

そんな訳で、このあたりの家の作り

彫刻家 中島 睦雄

方をみると、屋敷の北西の部分や北の部分に「水塚(みづか)」と呼ばれる高さ二メートルか三メートルくらいの塚が作ってあって、その上に蔵を置いたものである。これは現在でも、かなり残っている。

実際、昭和二十二年のカスリン台風による水害の時は、私の家でも一メートル五、六十センチ程の水位の濁流に襲われたものである。

この時にも、水塚とその上にある蔵によって、私の家族や近所の何人か、それに牛なども難を逃れた経験を持つ。さて、その水塚の上の蔵だが、平成に入ってから何年か経った或る年の秋、大きな台風がやってきて、蔵の近くにあって倒れかき、蔵の屋根を直撃し、屋根の真中あたりをつぶしてしまった。もうこうなったら、古い蔵を修理するのもお金がかかるということで、蔵を壊すことにした。そこで、中の品物を片付けていた時、二階の押入のような所の上に、一枚の板が置いてあるのを発見した。それには、筆書きの文字が書

いてあり、幸いにも、文字の面が下向きになっていた為、よごれを拂ってみたら読めるのである。そこには、おおよそ次のような事が書かれていた。

昔、洪水の折り、琴を抱いた贅女が死んで流されてきた。哀れに思つて住民達は死体を埋め、神として祀った。この贅女を護世の字に改めて、護世大明神とした。琴を抱いて流れ寄ったということから「琴寄村」とした。これが幾星霜を経るうちに忘れ去られてしまわないよう、書き記しておく

筆跡から見ても、百数十年前に書かれたものらしく、読めない部分も幾ヶ所はあるが、大まかに見て右のようなものようである。

現在でも護世社は、近くの神社に合祀されている。

これによると、いつの時代かわからないが、盲目の旅芸人である贅女が、琴(三味線と考えて良いと思うが)を抱いて流れ寄ったということで「琴寄」とし「琴寄村」とことよせむらとしたという訳である。

この場合、旅芸人の死を神として祀るとするのは、不自然であろうという考え方もある。実際、昭和二十二年の洪水の時には、女の人の死体が、裏の方に流れて来たことがあった。この時

は、いつの間にか誰かが、ここに居られては困るというので、舟で行って、下流へ下流へとその死体を流してしまつたらしい。誰一人として、神として祀ろうという声をあげた人はいなかった。時代が違ふ、人情も違ふ、ということでもなさそうである。

つまり、贅女を「人柱」として、生きたまま神に捧げたのではないか、そして、その事によって、近隣の住民の多くの生命と財産を救ってくれたということに神に祀ったのだと。事実、人柱を捧げた石に刻んだ碑を、古利根川水系の場所で見つけた事がある。

また別な言い伝えもあるらしい。

琴を抱いて流れてきた贅女を助けあげ、近くのお寺に住ませた。この贅女が薬の知識をもっていて、村人が頭が痛いと言えばこれを、腹が痛いと言えばこれをと、薬草が何かを与えて、村人が大いに助けられた。そこでその贅女の死後、神として祀ったのだ、という事を聞いたこともある。

いずれにしても、琴を抱いて流れ寄るという点を文字にして「琴寄・ことよせ」としたのであろう。

これにもまた、別な考え方もあるらしく、本当の事はわからない。また、わかる必要もないのかも知れない。

本当の由来はどうであれ「琴寄村」。良い言葉であり、良い文字である。

ティケノマ

JICAシニア海外ボランティア 仙道 富士郎

あつという間に在ラゲアイ一年半となり、あと六か月しか残っていない。一年半、本当に何をしてきたのだろうかという想いがつのる。お手伝いしている研究所の仕事は順調に進んできているし、草や木の命をいとおしんで、山形を中心に日本に建立されてきた「草木塔」をラゲアイの日系移住地に建てる試みも、なんとか目途がついた。何をそんなに欲張るのか。そういうことではなく、ラゲアイで過ごしてきた日々のことが、心象として浮かんでこないものである。色々と思いめぐらしてみると、ラゲアイに来てこの方、日々が緊張の連続であったが故に、毎日を過ごしていくのに精一杯で、日々の生活を記憶に留める余裕がなかったということのようにある。

やはりスペイン語恐怖症からくる緊張が中心にあるらしい。いまだにスペイン語による会話がほとんど成立しない。こちらの用件をスペイン語で言うときは、頭の中で一回内容を考えてから言葉として発するから、まずは分からない単語を電子辞書で調べて話せば何とかなる。しかし、そのあとに相手が私の言葉に反応して話すスペイン語がほとんど分からない。これでは会話にはならないのである。大変ありがたいことに、研究所の車が毎日送り迎えしてくれる。妻が来パして以来、研究所からかなり離れたところでの居住となり、片道三十分かかる。三人いる研究所の運転手たちは、最初、車を運転しながら話しかけてくれたのだが、あまりにも私がスペイン語を分からないものだから、最近では「今日は良い天気ですね」とか「今日は寒いですね」といった時節の挨拶をしたあとは、ラジオの音のボリウムを上げてくれて、私は音楽鑑賞とはなる。しかし、三十分間、二人の人間が、閉ざされた空間に会話なしに一緒に居るということが、こんなに気づまりで、辛いことであろうとは知らなかった。何か胸が詰まって来るの

である。到着するころには、私はかなり疲れていることになる。スーパーマーケットはこの点が良い。キャッシャーに表示された数字を見てお金を払えば良いのだから。でも、最初はここでも困った。キャッシャー嬢がなにか質問するのである。何回か聞いているうちに、それは「ティケノマ」と言っているらしいことが分かってきた。スペイン語の先生に「ティケノマ」とは何であるのか聞いてみた。彼女は笑いながら、それは「Tique no mas」(ティケットだけでいいの?)と尋ねているのであることを教えてくれた。この国では、税の控除を受けるには、しっかりと「factura」(勘定書)が必要であり、スーパーの領収ティケットでは用が足りないのだ。[facturaは入らないのね?』と確かめているのである。このことを学んで以来、私は胸を張って「シー(はい)ティケノマ」と答えてその場を切り抜けている。

いまこの文章を書いていて、ふと四十年前以上の米国留学時代のことを思い出した。マクドナルドにハンバーグを買いに行つて注文したとき、店員が私に何か質問するのである。私は汗をかきながら



(山形新聞より転載)

プ・リ・ズ・ム

河のほとりて 倉澤家

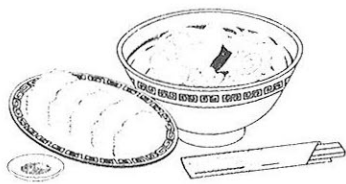
以前、成黎と小学校の同級生のお宅が営んでいる定食屋さんと一緒に出かけました。その際は、あいにく定休日であったため近くのそば屋で食事を済ませ、帰る事になりました。

その後しばらくは機会がなかったのですが『今度行こう、と約束したきりだったな』などと考えていた矢先に成黎からも「ねーそろそろ友達のお店に食べに行こうよ」とタイミング良く言われたため、「よっしゃ行こう」ということで再度伺うことにしました。

今回はあらかじめ定休日ではないということを確認してから行きました。のれんをくぐり、らーめん二つと餃子とビールを注文し待つこと暫し、その間に同級生の友達が店に降りて来て、ゲームを持って来てくれたり水を注いでくれたりとサービスをしてくれました。友達は夕食前でさぞお腹が空いて

いたであろうに、成黎がらーめんを食べ終わるまで横で待っていてくれ、帰りにはきちんと見送りをしてくれました。十年後くらいにもう一度いっしょに飲みに行こうかな。

小西 剛史



子どもたちの季節 仙道家

子どもたちは日々騒がしく、一方私は気が滅入ってしまう日々です。そんな中先日、子どもから元気をもらったと、感動した出来事がありました。

朝いつもの通り、慌ただしく学校へと出発した正太郎君。暫くす

ると何故か泣き叫びながら帰ってきてしまったのです。「貴子さーん！うええーぬれたーうええー」どうやら転んで水たまりに入ってしまったようです。正太郎君には申し訳ないけれど、私は大爆笑してしまいました。以前ならそのまま泣き叫び、学校に行くまでに相当時間がかかったであろう正太郎君。ですが今日は違いました。着替え終わり、まだ泣いていましたが、出発前に私が抱きしめ、「よしよし大丈夫！行ってこい！」と言うと、「いってきまーすうーえーん！」とものすごい勢いで走り出しました。私も追いかけて正太郎君の姿が見えなくなるまで「行ってらっしゃーい」と見送りしました。正太郎君は走っている間も、振り返りながら大声で「いってきまーす！」と言ってくれました。後から聞いたところ、何とか登校班に追いついたそうです。正太郎君の成長と、その走っている姿に本当に感動しました。こういう瞬

間に自分がいれることを本当に幸せだなと思っています。

田口 貴子



光の中で 佐藤家

蒸し暑い日々が続く夏、皆様いかがお過ごしですか。

子どもたちは新しい環境でそれぞれ頑張っています。新しい生活に慣れるのに精一杯だろうに、勉強に部活にと忙しい子どもたちです。中一の早希は中学校のサッカー部に入学しました。小学校二年生からサッカーを習い始めて以来のサッカー少女です。男子ばかりということと心配はありますが、

早希のやりたいという気持ちを大切にしたいと思っています。やはり中学校の練習は厳しいようで、最初の頃は弱音を吐くことが多かったのですが、最近は前向きに頑張っているようです。そんな彼女は本当にすごいと思い、尊敬しています。きっと、学校では色々なことを我慢して頑張っているのだと思います。そんな彼女たちが、家ではリラックスして楽しく生活できるように・・・と願っているのですが、なかなかできません。申し訳ないと思いつつ、何もできない私です。それでも、居ることを許されていることに感謝する日々です。

高野真夕子



原田家日記

庭の木々が一年で一番深い季節となりました。

時が経つのは早いもので、夏休みはもうすぐ折り返し地点となります。

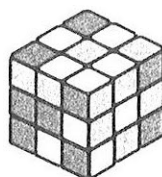
ある時、職員の田中要一が「ルービックキューブ」を持ってきました。田中がチャレンジし、数日後、六面色が揃い完成したルービックキューブを見せてくれました。育美と綾が興味を示し、挑戦しました。暇を見つけては、カチャカチャやり、また田中に「ここにこの色をもってきたかったらこうやって動かすんだ」とデータに基づいた方法を伝授してもらいます。私にはその理屈がさっぱりわかりませんが、育美は「うんうん、そうか」と納得したようすです。また、カチャカチャ。そして、ついに「ほら、できたよ」と完成形を見せてくれました。さすが、やわらかアタマです。

綾も一面を揃えるスピードはほんの数分で、子どもの秘められた力を実感します。

田中は、立方体のポピュラーな

ルービックキューブだけでなく、三角すい、十四面体のものなど様々なルービックキューブを持ってきました。育美と綾はそれらのルービックキューブにも挑戦していきます。「できたよ」という嬉しそうな声も何度もききました。

池田 祐子



季節のおとずれ 竹花家

梅雨も行ったたり来たりと、夏休みなのにぐずついた天気にかっかりする子どもたちが「暇だ暇だ」と時間を持て余しています。

この夏休みのお盆に、竹花家では佐渡へ行かせて頂きます。一昨年より池田多嘉子様のご厚意でお

宅に泊まらせて頂き、佐渡の夏を満喫させて頂いております。佐渡に行ったことのある沢田兄妹と行ったことのない清貴、冬子。それぞれに楽しみに待っています。

そんな中、清貴は今年高校受験を控えております。あの小さかった清貴が今では私の背も越し、高校受験・・・感慨に浸っていたいのも山々ですが、そうはいきません。勉強の苦手な彼には志望校があります。目標に向かって突っ走るしかありません。

この夏、清貴が自分の力を伸ばし、来年の四月を笑顔で迎えられるように、私は私なりの最善を尽くしたいと思っています。がんばれ、清貴！！

鈴木 洋一



アメリカで その3

菅原 哲男

前回までに、国民の生活する権利とその責任や義務を公が負うことになったこと。そしてその責任と負い方が、アメリカなどから直輸入されたものでその内容は分類収容を枠組みにするという方法によっていたなどを述べた。欧米に学ぶことがいけないということではない。考え方や制度などほとんど何もなかった頃のことである。むしろそれは当然のことだったといえる。しかし、欧米のやり方が最高で唯一であるかのような学者たちの言動とそれに寄りかかってやってきた制度政策が国などによって進められてきたということが今まさに問題となっているのである。

権利と義務。これは戦後教育の中で学んできた民主主義の土台といえるものである。そして権利と義務は契約社会を形成し、民主主義を成熟させてきたものでもある。

児童福祉施設の現場もこのような動きと無縁ではない。わずか四十年ほど前に施設で働くことは、それ以外に収入や資産のある者たちでなければかなり困窮した暮らしを強いられていたの

が通常であった。資産など持ち合わせのなかった筆者などは、家庭教師などをして何とか生き延びてきたのだった。大学卒の新人社員の月給が三万円程の時代に一万円を上下する給料が児童養護施設など福祉施設全般がはたらく者を保障する経済生活だったのである。

だから、私が初めて児童養護施設に迷い込んだ頃は子どもたちと雑魚寝するのが普通で、何とか職員宿舎をというのが当時の施設長など経営に当たる者たちの願いであった。

懐古趣味を披瀝したいのではない。雑魚寝に表象される、はたらく者と利用者との何の不思議もなく子どもたちの願いや思いを思ひかきまでも共感するために何の工夫や努力も要らなかったことの重要性である。昨今ではそういうことがまれにしかないのである。

権利と義務という意識が現場を覆い始めたのは、朝日訴訟などを典型とする利用者の訴えによったものが大きい。また、高度経済成長に少し遅れて整備されてきた施設労働者の労働条件や社会的地位の向上などが労働組合活動や

政治・社会運動などによったことなどでもあるだろう。

はたらく者たちのあらゆる意味での条件がよくなることは至極当然なことである。それによって、同時にその利用者が、それと同じかそれ以上の条件の向上を勝ち取ることが実現しなければならなかったのだ。

しかし現実には、利用者の条件は半世紀前と大きな違いが見えたらぬ。衣食住などの物理的な条件は遅まきながら整備されてきているのだが。

福祉施設ではたらく者たちの子弟が大学進学を希望しさえすればほとんど実現するのである。しかし、児童養護施設からの大学進学率は一桁代にとどまっている。

一九九七年度に施行された改正児童福祉法で、その目的に、利用する子どもたちの収容保護から社会的自立へとパラダイムが大きく変わったのである。それに伴い、児童の法的規定である十八歳での社会的自立には大きな困難があると認め、措置延長という制度が同時に加えられたのだ。しかし、現実には十八歳を過ぎると役人たちによって措置解除が当然のように行われ、措置解除された者は生活実費を支払って施設を利用することが出来るという反故同然の厚労省の当時の当該課長通知に準じているのである。○八年二月

現場から

続・光の子らしく

③7

岩崎 まり子

向日葵の背も伸び切り、大輪の花が夏を彩っております。

皆様、いかがお過ごしですか。

先日、高三の憲也君の三者面談がありました。

それに先立ち、家でも彼と進路について話し合いの時を持ちました。「できれば大学に行きたい。」低くて小さかったけれど、はっきりとした彼の言葉には明確な意志が感じられました。

かつて、高校の受験のとき、「受け直したい。」と言いつつ彼を結果的に思いとどまらせてしまったということが

あり、それは長いこと、とり返しつかない失敗として私の胸につかえたままになっている事柄です。そのことで、彼に何か言われたりしたことは全くないのですが、入学後の彼は部活を途中で辞め、時間とエネルギーを持て余し、反社会的な行動に走ってみたい、そのことで自己嫌悪になり、投げやりになったり無気力になったり……そんな彼を見守るしかなかった無力な私の意識は、あの受験の日に戻ってしまうのです。

彼が大人をあきらめてしまうのは、あの日に始まったことではないにしても、あの日やその後の部活についてのやりとりは、かなり

決定打になってしまったのではないかと今でも思い出せば落ち込んでしまいます。

「どうせ……」
は、入所当初の彼の口癖でした。そして、人形を使つての自殺ごっこ。彼があきらめていたのは大人や社会だけでなく、自分自身だったのではないでしょう。気が付いたらなくなっていたその口癖でしたが、また出始めたのはあの頃でした。

考えてみれば、自尊の心を碎きながらの親との生活だったはずで、あきらめること、求めないことは彼らの悲しい自衛手段です。ここへきてからの生活だって、自慢できる境遇ではないということでは同様にありません。

学校と自室を往復するだけのような生活の中で悩み続け、少しずつ前を向いてきた彼が、「勉強しか頑張れることはない」と、コッコツ学習しているのを知って、何度か、

「進学したいんじゃない？」と尋ねてみたのですが、その度に、「わからない。決めてない。」

。突き放された寂しさを感じつつも、思いが確実なものになったらきつと話してくれるだろうと

信じて待つしかないとも思っていました。

ですから今、ようやく自身の未来をあきらめまいとする彼の意識が息を吹き返してくれたこの機会を逃したくありません。

学資をどうするのか、住む所は？生活費はどうするのか……。課題は山積みです。けれど、彼らがもうこれ以上あきらめなくてもいいように、そして、親の経済や学歴、社会的位置などをもちもしいない生き方をしたいって欲しい……。願いだけでどういかなる程現実実は甘くはないでしょう。けれど、願い、求め続け、試行錯誤しながらでも彼らの卒園後の長い人生を見据え、応援していきたいと思えます。

子どもたちの夏休みも、あと少しです。最後の一日まで、輝きに満ちた夏休みとなりますように。





日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 2009年4月1日▶2009年5月末日

2009年4月現在

幼児5名 小学生15名 中学生8名 高校生7名 措置外5名 計40名

- 6日 進級進学祝い 子どもたちが1学年ずつ上がって大きくなっていく ひときわ成長著しい中学校3年生と高校3年生の姿が頼もしい
- 7日 光の子どもの家後援会会長大塚吉春様の通夜へ田中施設長はじめ職員子ども多数参列 生前の御厚意を心より感謝
- 8日 各学校入学式 始業式 緊張の面持ちで席に座る小学校1年生を後ろから見守る 友達がたくさんできますようにと祈りながら
- 17日 3才の皆川良太くん入所 立派な体格で元気いっぱい 田口保育士がやんちゃな担当児と共に歓迎 毎日が賑やか
鈴木重義先生職員礼拝説教奉仕 杉本英夫さん来訪 感謝
- 24日 東埼玉バプテスト教会木田牧師夫妻夕礼拝説教奏楽奉仕 感謝

〈4月の物品ご寄贈者〉

小林 針ヶ谷奈恵 小早川典子 松本明子 岡本雅道 衛藤智恵 清原亨 横須賀 杉山和俊 他多数の御各位様

5月

- 4日 子ども祭り ゴールデンウィークの期間に憲法記念日と子どもの日があり児童福祉週間にもなっていることを覚えて楽しみだけでなく自分たちが享受している生活は当たり前ではないのだということを考えるための行事 小学生全員によるゲルニカは同ページ上段に載せてあります
 - 12日 古河市民生委員39名来訪見学
 - 13日 赤十字奉仕団除草奉仕 感謝 お昼には光の子どもの家後援会の皆様が心を込めて打って下さったうどんを頂く 重ねて感謝
 - 16日 聖学院大学ワーク8名来訪
 - 23日 第89回光の子どもの家理事会
- 〈5月の献品ご寄贈者〉
- 鈴木敏子 弘中余糸子 西ノ園瑠璃 鴨田洋子 西貝京子 加部芳子 加納晶子 後藤利子 大川誠子 川村雅保 古川明 豊国道江 鳥越宏子 竹内阿久利 小林幸子 加須教会 小山田貴子 古川景子 春山のり子 野本お茶店 あづさわ化粧品 伊藤 斉藤米穀店 島崎なぎさ 坂本和加子 かすかべや 市川千代子 他多数の後各位様

////// ———— 反 射 光 ———— =====

☆夏休みも早くも折り返し地点を迎え子どもたちは真っ黒に日焼けしております☆八月を迎え田んぼの稲もスッと背を伸ばし青々と風に揺られていきます☆毎年感じるのですが夏を終えたときに見せてくれる子どもたちの成長は目を見張るものがあります☆今年も夏の終わりに写真家の福島さんが子どもたち職員全員のポートレートを撮って下さる予定です☆去年一昨年の写真と今の様子を比べると見えるほど大人びて見える子どもたち☆御厚意に心から感謝しております☆つい流れていきがちに日常を切り取りふと足を止めて正視する☆子どもたち一人一人にとっての二期また来年に向けての準備が必要です☆夏休みが惰性で終わらぬよう常に前向きに一步一步進んでいきます☆こうして再確認しております☆成長著しい夏の瞬間が刻まれている☆今後ともご理解ご支援をよろしくお願い申し上げます☆

(洋)